

図表 社会課題解決型の未来探索ミュージアム



様々なカテゴリーでの未来体験を通じて社会課題を俯瞰して考える視点そのものを学ぶ

子どもが抱いた疑問を、親も一緒に考える。友人同士で、社会課題について語り合う。そうした光景が、この北の丸に広がっている。私たちは、この北の丸の地を、科学技術立国・日本を支える人材育成のハブにしたいと考えている。世界中から視察団が訪れ、ここで学んだ子どもたちが、やがて日本の、そして世界の科学技術を支える人材となる。そうした未来を、皆さまと共につくっていききたい。

産業界と共に 次の60年を築く

本事業については、必要な資金を調達する準備を進めている。経団連の会員企業・団体をはじめとする各界の皆さまに、1964年の科学技術館建設の折にも多大なるご支援を賜った。今般の科学技術館再整備は、日本の産業界が次世代人

る場をつくることである。子どもが抱いた疑問を、親も一緒に考える。友人同士で、社会課題について語り合う。そうした光景が、この北の丸に広がっている。私たちは、この北の丸の地を、科学技術立国・日本を支える人材育成のハブにしたいと考えている。世界中から視察団が訪れ、ここで学んだ子どもたちが、やがて日本の、そして世界の科学技術を支える人材となる。そうした未来を、皆さまと共につくっていききたい。

新しい科学技術館は、国や財団だけでなく、日本の産業を築いてこれた企業の皆さまと一緒に、次の日本を育てる場所にしていきたい。だからこそ、「社会課題の設定」「体験テーマ」「新技術を通じた未来の可能性」「次世代人材の育成プログラム」など、新しい科学技術館のあり方を早い段階から共に語り、共に描き、共につくって下さる、強い想いをお持ちの皆さまに、ぜひファウンディングパートナーとして参画していただきたい。3300万人の来館者を育んだこの場所を、次の60年へとつなぐ。そのために、この北の丸から始まる未来に、皆さまの力添えを心より願いたい。

◎本件連絡先
公益財団法人 日本科学技術振興財団
山口雅彦 TEL 03-3321-8442
e-mail: satsuibh@jsf.or.jp

Society 5.0の社会実装のためのご支援のお願い —— 科学技術館再整備のご紹介



東原敏昭
ひがしはら としあき
日本科学技術振興財団
理事長
経団連審議会副議長
日立製作所会長

科学技術館が 育んできたもの

1960年、日本科学技術振興財団は、科学技術の水準の向上に寄与することを目的として、産学官の総意により創設された。その4年後には、「科学技術」という言葉を館名に冠した「科学技術館」が北の丸公園に開館し、以来、当館を訪れた子どもたちは3300万人を超えている。この300万人の中から、日本のものづくりを支え、技術を切り拓いてきた技術者、研究者、そして経営者を数え切れないほど育んできた。今、本稿をお読みになっている皆さま

社会課題を俯瞰し 解決する人材を育てる

私たちは今、次の60年を見据え、この科学技術館の建て替えに取り組もうとしている。これは単なる施設の更新ではなく、これからの日本の科学技術力を担う子どもたちを育てるための、極めて重要な社会的投資の一つだと考えている。これまでの科学技術館は、科学の原理や理論への興味を育む場として大きな役割を果たしてきた。その役割は、これからも変わることなく大切に継承していく。一方で、私たちが子どもたちに伝えなければならぬことが、今新たに加わっている。それは、一つの技術だけでは、もはや複雑化する社会課題を解決することができないという事実である。Society 5.0では産業の壁を越え、人々の生活は多様に変化し、データとテクノロジーでつながり、社会はより複合的に進化していく。例えば、私たちは2050年のカーボンニュートラルの実現を目指しているが、同時に、生成AIの活用が急速に広がり、データセンターの電力消費は増え続けている。この電力を、いかに賄っていくか。再生可能エネルギーを増やすだけでは、安定した供給を確保することはできない。原子力、火力、再生可能エネルギー、それぞれの電源をどう組み合わせるか。そして、その電力をいかに

未来探索ミュージアムへの挑戦

私たちが今考えている新たな科学技術館は、「社会課題解決型の未来探索ミュージアム」である。「City・Fintech」「Life」「Frontier」「Electronics」「Material」「Entertainment」など、様々なカテゴリーでの未来体験を通じて、社会課題を俯瞰して考える視点を学ぶ場としたい。従来の「見る→触れる→学ぶ」という体験にとどまらず、「課題を発見する→考えてみる→解決する」というプロセスを通じて、子どもたちが未来を探究できるように、科学技術館を目指している。建物は第1期と第2期に分けて整備する計画である。第1期では、主要展示エリアおよび基幹施設の先行オープンを目指し、2029年度の着工、2032年度末の完成を予定している。

さらに、私たちが大切にしたいのは、子どもたちだけでなく、その家族や仲間が共に学べ

無駄なく、効率よく届けるか。電源構成の最適化、送配電網の効率化、そして省エネの高度化、これらを俯瞰し、全体最適を考えられる人材がいなければ、カーボンニュートラルの実現は、絵に描いた餅に終わってしまう。このように、これからの社会課題を解決するためには、一つの技術に精通するだけではなく、複数の技術をつなぎ合わせ、全体を俯瞰し、最適な答えを見つけ出す力が求められる。私たちは、そうした力を備え、社会課題を解決していく人材を育てる新しい科学技術館が必要であると考えている。